NEWS LETTER　http://kodomoryoyoshien.jp/に掲載　　May　2025

特定非営利活動法人
子ども療養支援協会通信
Japanese Association for Child Care Support　Vol. 38

―すべての小児病棟に子ども療養支援士（Child Care Staff）を！―

協働の力をともに育む

～ ”child centered practice”のために

青山学院大学 コミュニティ人間科学部　教授
横堀　昌子

第 11 回日本子ども療養支援研究会で、私は、社会福祉（ソーシャルワーク、子ども家庭福祉、社会的養護）の立場から、子どもの福祉追求の理念や支援の方法論、子どもや家族への「切れ目のない支援」の実現に向けた多職種連携について、教育講演をする機会をいただきました。ここに感謝をもって、そのエッセンスをお届けします。

連携と協働をめぐって

連携とは、「共有化された目的を持つ複数の人及び機関（非専門職も含む）が、単独では解決できない課題に対して、主体的に協力関係を構築し、目的達成に向けて取り組む相互関係の過程である」（吉池ほか、2009）等とされ、福祉分野においては必須の要素です。支援の展開過程において一つの職種・機関・組織・立場では担えない限界の認識を起点として、推進されてきました。支援目標達成のため、関係者・他機関・組織・立場からの協力を要請し、相互に補完しあって目標を成し遂げることを、「チーム」全体で試みるのです。

吉池ら（2009）は、同じ目的をもつ複数の人および機関が協力関係を構築して目的達成に取り組むことを「協働 “collaboration”」とし、協働を実現するための過程を含む手段的概念を「連携 “cooperation”」、協働における「連携」の実態として「チーム」を位置づけました。

目　次

2025 年（令和 7 年）5 月　第 38 号

寄稿
✧　協働の力をともに育む
～”child centered practice”のために
横堀　昌子　--1
寄稿
✧　小児病棟にわくわくを、みんなで届けよう！
熊谷　恵利子　--3
報告
✧　修了式の報告　--5
活動報告
✧　「第 19 回病児の遊びとおもちゃケアフォーラム」　--7
研究
✧　自家造血幹細胞移植を受ける幼児期の子どもと家族に対する支援
北條　由華　--8
保護者の広場
✧　保護者の声から療養環境を見つめて
宮原　佑衣　--9
こどもの広場
✧　こどもの声からみえてくるもの
才木　みどり　--10
CCS の窓
✧　子どもたちの「日常」をともに
丸山　里奈　--11
初めまして！
✧　子どもの今を大切に、未来に繋がる支援を
松下　洋子　--12
✧　夢を現実に！
藤倉　みゆ　--13
✧　子どもの自信を引き出せる関わりを目指して
三宅　ふう花　--14
✧　子どもの気持ちに寄り添い、安心できる存在に
永川　千夏　--14
事務局からのお知らせ　--15

筆者は、形だけの「連携」で終始せず、より積極的で新たな動きを創出しながら専門職ならびに必要な関係者がともに「協働」することを重視し、実務家（行政職や民間の支援者チーム）、里親等、家庭における養育者の育成に取り組んできた者です。

自己完結させない専門性

専門職は、自らの担当範囲と専門性に基づいてそれぞれの業務に精一杯臨んでいます。しかし当事者にかかわるイメージが自分の業務の範囲内にせまくとどまると、その前後の支援過程、あるいは当事者の周辺の広がりへの認識が遠いものになることもあります。“doing”（何をしたか）よりも“being”（結果どう在るか、そして”well-being“）が重要なのですが。よって、「つなげる力・つながる力」、連続性をもって見通す感覚、「俯瞰」する姿勢が求められます。

ソーシャルワークの領域では、当事者と環境との間で何が起きているか、その相互作用を重層的に捉え、活かすエコロジカルなアプローチ、ミクロ・メゾ・マクロの各視点を重視します。そのため、社会資源の活用や開発、当事者の側に立った支援過程（トータルプロセス）を考えます。例えば、児童相談所の権限で措置される子どもなら、保護前の家庭生活・地域生活・社会生活の状況確認、保護前後のアセスメントとケア、里親家庭や施設に措置する際のつなぎ（アドミッションケア）、措置後の生活支援（インケア）・自立支援（リービングケア）、アフターケア等をつなぐ伴走型支援が求められます。社会資源を活用し、ないものは創り出し、動かしバトンリレーも試みます。大人たちのつながる輪の中で、子どもは安心・安全を回復・獲得していけるのです。

ただ、連携・協働は福祉の領域でも常に課題です。アセスメントの観点が一致しない、リスクに対する危機感にズレがある、支援目標が一致しない、介入方法の発想が異なる、見立ての共有がしにくい、相互の関係性が対等でなく話しにくい、他機関が動いてくれない等。こうした中に、「価値」の問題も見え隠れします。

しかし、だからこそ、「子どもの最善の利益」は、子どもの代弁者としての関係者が相互に対話すること、無理して同意を得ることを目指すというよりは、相手の示す見解の根拠を受けとめあう合意形成のプロセスによって作り上げる最優先事項といえます。「子どものために」というよりも「子どもにとって」に心を置きながら。

支援チームの責任者には、状況への多角的で適切な「立体的理解」を試みるアセスメント、支援目標の確定、支援方法の優先順位検討、支援提供後の確認等の重要な局面において、他者の「声」に誠実に耳を傾け、自らの肌感覚をともにするセンスも求められます。

これらは、多くの分野でまだ「宿題」といえるでしょう。多職種同士も専門性を相互理解し協働の動きを想定できていなければ、子どもへの説明は尽くせません。

「子どもの権利とは自分が大事にされていることを子ども自身が実感できること」（許斐有）。多様な困難があるからこそ、子どもの権利保障にこだわる実践、子どもと家族の幸福（福祉）実現のためのチャレンジを重ねて参りましょう。心したいのは、一番の協働相手は子ども自身および家族であること。関係者の「声」を聴き、対話し調整し、それぞれがもつ強みを活かす“child centered”な協働のありようを、ともに模索し続けていきたいものです。当事者を個人でなく「コミュニティ」で支えようとする私たちの日々の働きを、「切れ目のない支援」に近づけていくために。

（参考）吉池毅志ほか「精神科ソーシャルワーカーの精神保健福祉実践活動 保健医療福祉領域における『連携』の基本的概念整理～精神保健福祉実践における『連携』に着目して」、『桃山学院大学総合研究所紀要』34 巻、第 3 号、2009 年

寄稿

小児病棟にわくわくを、みんなで届けよう！

小児病棟わくわく応援団 代表 熊谷恵利子
（認定 NPO 法人日本クリニクラウン協会 事務局長）

小児病棟わくわく応援団のことを知っていますか？小児病棟にわくわくを届けたいという想いをもった 6 団体が集まり、2023 年 3 月に「小児病棟わくわく応援団」が誕生しました。「入院中のこどもたち、そのきょうだい、家族を応援したい」「スタッフのみなさまと一緒に小児病棟の療養環境を支えたい」そんな団体が集まり、ゆるやかに情報共有し、小児病棟にワクワクを届けるために連携していきたいと考え、活動しています。

このきっかけとなったのが、入院経験のある母親から「入院中にこどもにとって楽しいことを見つけたいと『入院・こども・遊び』とネット検索しても、あそびの情報が見つからない。クリニクラウンと心魂プロジェクトさんのコラボを通して心魂プロジェクトのことを知った。もっと早く知ってたら楽しい時間をもっと過ごせたのに」と言われたことです。検索してみると唖然としました。必要な情報にたどり着くのは難しい。情報が必要なところに届いていないこと痛感しました。コロナ禍、オンラインでのイベントが増え、クリニクラウンの活動以外にも素敵な団体がオンラインプログラムがあり、入院中のこどもにとって病室から世界とつながる機会が増えると喜んでいたのですが、家族や病棟スタッフには、その情報が届いていない。また小児病棟ではオンライン環境が整っていないことに気づかされました。

病気や障がいを抱えるこどもたちを支えていくためには、こども、きょうだい、家族全体をサポートしていく必要があります。そして、全国の小児病棟の療養環境を全体で考えた時、1 つの団体では到底解決することができない。だからこそ、いろいろな立場の人や様々な団体がつながっていき、みんなで取り組むべき課題なのではないかと改めて思いました。これまで病気や障がいを抱えるこどもたちを支える支援団体同士のネットワークはほとんどなく、必要性を感じながらもマンパワー不足から積極的に取り組めてきません。そこで、これまで交流のあった 6 団体に声をかけ、小児病棟わくわく応援団をたちあげました。

・認定 NPO 法人キープ・ママ・スマイリング
https://momsmile.jp/
・NPO 法人心魂プロジェクト
https://www.cocorodama.com/
・NPO 法人しぶたね https://sibtane.com/

・認定 NPO 法人 難病のこども支援全国ネットワーク
https://nanbyonet.or.jp/

・認定 NPO 法人日本クリニクラウン協会
https://www.cliniclowns.jp/

・一般社団法人星つむぎの村
https://hoshitsumugi.org/

現在は、定期的なミーティングを行い、全国の小児病棟の療養環境を支えていく方法をたのしく模索しています。また、オンラインで「小児病棟わくわく勉強会」を実施し、病気や障がいを抱えるこどもたちや家族を応援する支援団体や小児病棟の取り組みを、支援団体と病院スタッフ・家族などいろいろな立場の人と一緒に小児病棟の療養環境をみんなで考えていく機会を作っています。そして、小児病棟にわくわくを届ける活動は、保育士・CLS・子ども療養支援士・看護師・医師・栄養士など病院のスタッフも素敵な取り組みをたくさんしているので、好事例を発表する機会となればと考えています。

小児病棟わくわく応援団の活動を通して、小児病棟の療養環境を外部から支えていくための課題は①支援団体のネットワークづくり　②情報集約・発信（病院の好事例や外部支援団体の情報を集約的に届ける）③病棟スタッフとの関係性の構築（病棟スタッフの立場や役割・小児病棟の要望などのヒアリングをおこない相互理解を深める。）④小児病棟を応援する社会的資源（外部支援団体・ボランティア・資金など）と病院をつなげることだと思います。

今後は、小児病棟わくわく勉強会を通して、支援団体への理解と共に病棟スタッフの立場や役割や小児病棟の要望などをヒアリングし相互理解を深める機会をつくっていきたいです。

これまで、それぞれの団体や病棟スタッフが、独自の努力と経験と人脈で小児病棟の療養環境を支えてきました。そのことに敬意を払いながら、お互いの専門性や強みを生かし、それぞれの経験や知恵や工夫を全体で共有することで、互いに協力連携していくようなネットワークを将来的につくっていきたいです。まだまだ道のりは遠いですが、小児病棟わくわく応援団という実験的に取り組みを通して、社会的なニーズをとりあげ、継続可能なネットワークをどのようにつくっていったらいいか検討していき、に取り組んでいきたいです。子ども療養支援士のみなさまも加わってもらえたら心強いです。

小児病棟わくわく応援団
https://www.cliniclowns.jp/04_wakuwaku.html

公式 LINE　　ホームページ

報告

令和６年度子ども療養支援士養成コース

修了式の報告

令和７年３月１５日(土)、順天堂大学にて令和６年度子ども療養支援士養成コースにおいて認定された新しい子ども療養支援士５名の修了式が行われました。今年は様々な背景をもつ５名が集まり、講義や実習もとても活発にお互いに刺激をしあって切磋琢磨されてこられました。そんな５名から修了報告の発表もあり、新たな旅立ちを協会役員や教育委員、実習指導者、子ども療養支援士の先輩方から温かく見守られ、激励の言葉が送られました。

４月からは関東や関西にてそれぞれ子ども療養支援士としての歩みを開始されます。今後も活動報告を行っていきたいと思っておりますので、新たな仲間となりました５名をどうぞよろしくお願い致します。

会場に来られなかった CCS も含めて先輩方から CCS の活動で役に立つ応援の記念品が贈られました。

中央左より 尾田亜矢子さん、佐藤ふみさん、（画面）濵田ひなたさん、前田みほさん、行本未希さん

（子ども療養支援協会 事務局）

修了式では、理事の藤村先生より祝辞を賜りました。

2025 年子ども療養支援士修了式祝辞

理事 藤村 正哲

新しく認定された 5 人の CCS のみなさん、おめでとうございます。今日は私の子ども療養支援活動についての考え方をご紹介して、お祝いの言葉に代えたいと思います。

「こどもの気持ちを記録することの意義」

私は 20 年間、日本の超早産児の退院記録をデータベースとしてまとめる事業に関係してきました。年間に 4000 人、既に 8 万人のデータベースが出来上がっていて、毎年追加され、世界でも希有なシステムを構築しています。

https://plaza.umin.ac.jp/nrndata/pdf/10YearReportadj.pdf

人のデータベースとは何でしょうか？それは人間の営みの記録です。つまりうそがありません。人間の真実の姿が残っています。これは人に関わるみんなの毎日の仕事と努力があってこそできる、着実で誤りのない真実の記録なのです。日本の新生児科医はそのデータベースの解析を続けて、この 20 年間で 100 以上の英文論文で発表してきました。それが専門医としての責任だからです。Real world data は貴重な文化遺産として評価できると考えています。

子ども療養支援士とはどういう専門家でしょうか？「療養しているこどもの一番近いところにいて、その真実の訴えをこども自身が真っ先に届ける専門家」です。わたしは思うのです。子ども療養支援士の社会的責任とは何でしょうか？それはこどもの真実の訴えを受ける立場にいる専門家として、こどもに代わって社会に届ける責任ではないでしょうか？みなさんの職業としての倫理、つまり子ども療養支援士の職業実践論はそこにあると考えています。

ではどうすればその責任は果たせるのでしょう？そのひとつは、最初に触れたデータベースをつくることに始まります。新生児科医は毎日診療した早産児の専門的な記録を 20 年間で 8 万人のデータベースとして作り上げています。今 40 人余りの CCS は毎日 40 人余りのこどもの悩みや喜びを受け止めてきました。ひとり一人の毎日の貴重な支援活動は CCS の天職です。その仕事の中に抽出されるこどもの気持ちや悩みこそ、この日本でただ一人あなたが CCS として受け止めているこどもの真実です。それは専門家として記録しなければいけないデータであり、それを積み上げてゆくのが子ども療養支援士データベースというものです。療養しているこどもの課題とその解決方法を検討しようとするとき、「子ども療養支援士データベース」の中に解決のひとつの鍵 real world evidence があるのです。

今日のお話はここまでにしましょう。皆さんの仕事はそうしたこどもの悩みの評価に始まり、それ対応する支援があり、そしてこどもに残される結果があります。データベースはそれらの事業をまとめてゆく研究の宝庫になるのですが、その仕組みの構築は皆さん自身の仕事に違いありません。

活動報告

「第１９回病児の遊びとおもちゃケア」フォーラム

令和７年３月９日に認定 NPO 法人芸術と遊び創造協会主催の「病児の遊びとおもちゃケア」フォーラムの体験ワークショップと展示に出展させていただきました。

各地で活動する子ども療養支援士から活動のお写真などを集め、子ども療養支援士の日々の様子をご紹介しました。「子ども療養支援士、聞いたことはあるけど、、」と何となくは知っていたという方が具体的にはどのような活動をしているのかと尋ねてくださり、協会のパンフレットを手に取られる方も多くおられました。また「子ども療養支援士を目指しているんです」と興味をもって来てくださった方、「何か協働できることがあると良いですね」とお互いの活動を通して、子ども療養支援を一緒に考えてくださる方などたくさんの方々とお話をさせていただきました。他の団体の方の取り組みなども見させて頂き、新たなおもちゃの魅力や遊び方の工夫など、子ども療養支援士の活動でも参考にさせていただきたいことがたくさんありました。

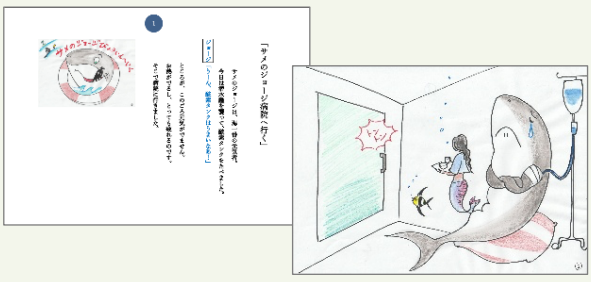
体験では「紙芝居仕立てのプレパレーションツール」の紹介や、「ぷよぷよボール宝探し」を紹介しました。ぷよぷよボールの感触に「大人もはまりますね」と興味をもってくださり、ジップロックにいれたら小さな子や処置室などでも活用できるかもとお話すると「ぜひやってみたいです」と写真を撮って帰られた方もいらっしゃいました。

新たな学びや刺激を受ける一日となりました。今後も子ども療養支援士の活動をたくさんの方に知ってもらえるように様々な広報活動にも取り組んでいきたいと思います。

（当日参加：２期生 丸嶋史代、３期生 笠井晶菜、14 期生 佐藤ふみ）

展示ブース

ぷよぷよボールにバスボムのおもちゃなどを隠して探すビンゴゲームを体験してもらいました。



医療拒否の強い幼児期のお子さんへ医師や家族と協働して作成した白血病についての紙芝居を紹介。

研究

自家造血幹細胞移植を受ける幼児期の子どもと家族に対する支援

北條 由華（国立がん研究センター中央病院 CCS）

【背景】

当院では、神経芽腫の治療法として患者本人の造血幹細胞を輸注する自家造血幹細胞移植（以下、自家移植）が行われている。自家移植を実施するにあたり、患児は慣れない検査・処置、隔離環境、体調の変化、などの精神的負荷を伴う様々な体験を乗り越えなければならない。本事例では、自家移植を受ける患児とその家族に行った支援について報告する。

【方法】

神経芽腫再発の４歳男児に対して行った支援を、診療録を基に後方視的に検討した。

【結果】

子ども療養支援士（CCS）は検査入院時から遊びを通して関係構築をしつつ、①末梢血幹細胞採取②前処置（大量化学療法）③輸注～正着、の３段階で関わった。

①　末梢血幹細胞採取

化学療法後から大量化学療法までの期間は、好中球の回復を促す目的に皮下注射（G-CSF）が連日施行される。患児が痛みを伴う治療に対し主体的に挑めるよう、ぬいぐるみを用いて治療内容の理解を促し、効力感を高めるためにスタンプラリーを用いた支援を行った。その結果、患児は翌日に予定されている処置の内容を自ら母に伝え、処置が終わる度に自分の頑張りを周囲に伝える様子が見られた。また、末梢血幹細胞採取時には、母や多職種と協力しながらディストラクションを行うことで、患児は、覚醒下で長時間の安静を保つことができ、安全に末梢血幹細胞採取を終えることができた。

②　前処置（大量化学療法）

前処置中は長期間の個室隔離となるため、病室内にお気に入りのキャラクターを装飾し、個別の遊び場を設置することで、隔離中も患児が馴染みのある環境で安心して過ごせるように努めた。隔離期間中は、隔離前と変わらない様子で落ち着いて過ごすことができていた。

③　輸注～生着

この期間は、感染による発熱が長期間続き回復の見通しが立たない状況であった。付き添いができない時期は、手紙やテレビ電話を用いて患児と家族が心理的に繋がれるよう支援し、ごきょうだいへの病状説明も同時に行った。ご家族の不安を継続的に傾聴し、必要に応じて医師に追加説明を依頼することで、ご家族の不安解消に努めた。患児とご家族は、予想外の事態を幾度となく経験したものの精神的に崩れることなく無事生着を迎えることができた。母からは当院のサポート体制のおかげで家族内のバランスがうまく保ちながら治療に挑むことができた、当院で治療が受けられてよかったなどの言葉が聞かれた。患児は退院の際、「お家もいいけど、病院もいいよね。」と母に話していた。

【考察】

本患児は、元来療養環境への適応が良好であり、療養環境における遊びが入院・治療を乗り越えていくための原動力となっていた。そのため、治療に伴う療養環境の変化を最小限にし、遊びを最大限に活用したことが長期の治療を乗り越えていくための重要な要素となったと推測できる。また、家族とは信頼関係を築きながら日々コミュニケーションをとりあうことで、不測の事態でも家族のニーズにいち早く気づくことができ、適切なタイミングで支援することに繋がったと考えられる。

末梢血幹細胞採取の説明

病室の装飾

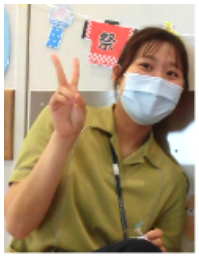
皮下注射のスタンプラリー

（第 11 回日本子ども療養支援研究会　一般演題）

保護者の広場

保護者の声から療養環境を見つめて

宮原　佑衣（倉敷中央病院　CCS）



入院している子どもたちにとって治療を受ける場であり、生活の場でもある病院。

保護者の方の言葉から、療養環境について考えてみたいと思います。

「楽しみにしているんだと思います。だって、部屋に帰ったらあの布の中で生活しないといけないですからね。」

中高生のお子さんが複数人入院していると、子ども療養支援士が声をかけてみんなでゲームをしたり、お話しをしたり一緒に過ごす場を持っています。そこに参加してくれたお子さんの様子を見た保護者の方が、ふとつぶやかれた言葉でした。

ベッドの上、約 1 畳分のスペースで 1 日の大半を過ごします。日中は院内学級がありますが、それでもまだまだ制限された中で生活していること、寄り添われている家族の思いを今一度気づかせていただきました。広い空間に出て、同じように頑張る仲間と出会い、日常を過ごす場所をより一層丁寧に大切に設けたいと感じました。

「窓側だと、日がさして朝とか、日が暮れて夜とか 1 日の流れがなんとなくわかるから安心するんです。」

大部屋であると、窓側と廊下側があり、ベッドの位置によっては、どうしても自然光が入らなかったり、外の景色が見えなくなってしまったりすることがあります。

この言葉は、廊下側のベッドから、窓側のベッドに移動された保護者の方に教えてもらいました。私たちも当たり前に、日の光を浴びて朝を感じ、日が暮れて夕方になると 1 日の終わりを感じていると思います。窓の外をぼんやりと眺める時間が好きな人も少なくないのではないでしょうか。痛みがあったりするわけでは

ないので、すぐにストレスと感じにくい部分だと思います。光や窓の外を感じることは、時計が読めない、読むことが苦手なお子さんにとっては、1 日の見通しを持つ大切な情報源であること、忘れないようにしたいと思います。

「なんかもっと治療だけしているんだと思っていました。こんなにあそんで楽しい時間があるなんて思わなかった。ありがたかったです。」

長い治療を終えて、退院の際に保護者の方からいただいた言葉です。「病院」「入院」に対して大人側もポジティブなイメージがないこと、知り得る機会がないことを感じました。一方その期間を経て、大変なこともたくさんあった中で、あそびの時間を「楽しい時間」として捉えてもらえたこと、振り返ってもらえたことに嬉しく思いました。子ども療養支援士として「あそびの力」を信じ、向き合い続けたいと思います。

「自分が子どものときに入院していたときは本当に地獄みたいだった、怖かった。そのときとは全然違う。」

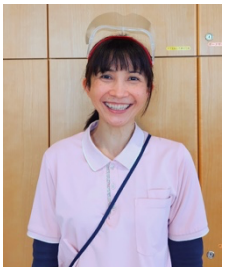
保護者の方が幼少期の医療経験を振り返る言葉を聞くこと、少なくないなと感じています。保護者の方から聞いた入院へのイメージに怖さでいっぱいになっているお子さんに出会ったこともありました。

少しずつ広がり行く子どもに優しい医療環境ですが、「今」医療にかかる子どもたちの経験と記憶が、未来に繋がっていくのだと感じます。今も、その先も、子どもたちとご家族の医療体験がやさしく、温もりがあるものでありますように。微力ではありますが、その一助となるべく努力したいと思います。

こどもの広場

こどもの声からみえてくるもの

才木 みどり（宮城県立こども病院 CCS）



「あのさ、ここにいると赤ちゃんになった気分になるんだよ」

小学校 2 年生の男の子がふっとつぶやいた言葉です。プレイルームで一緒に遊んだ後、病室にもどる時に点滴台を押しながらちょっと不機嫌様な表情で。

ベッドサイドまで一緒に行き、“どんな時に赤ちゃんの気分になるの？”と聞いてみました。

「だってね、ぼくさ、採血って知ってるよ。なのに、“ちっくん頑張ったね”っていつも言われるんだもん。ちっくん、じっとできててえらいねって。」

「はみがきだって自分でできてえらいねって。ぼく、もう小学生だよ。それくらい自分でできるよ。なんにもできない赤ちゃんじゃないよ」

A 君は治療薬の血中濃度の確認のため頻繁に抹消からの採血があるお子さんでした。入院も何度か繰り返しており、入院の理由やなぜ採血が必要なのか、採血を頻回にする意味も理解して、「ちょっと痛いけど、10 数えてたら終わるんだ。だから、先生がいくよ～って言ってから目をつぶって 10 数えるとうまくいくんだよ」と自身のコーピング方法も実践できていました。また、A 君は 3 人きょうだいのお兄ちゃんで、お

うちでは 2 人の妹がいます。自分のことは自分でするが当たり前の日常生活しているＡ君にとって、入院生活の中でスタッフが何気なくかける言葉やＡ君の中では出来て当たり前のことを”えらいね“と褒められることに『赤ちゃん扱いされている』と感じているようでした。

もちろんスタッフには悪気はありません。Ａ君の頑張りを様々な形で伝えようという気持ちであったり、こどもにとって優しい言葉を選んでいる結果でもあります。しかし、同じ年齢であってもこどもの育ってきた環境など様々な要因があり、こどもの受け取り方は様々です。相手を思っての言葉や態度もこどものプライドを傷つけてしまうこともあります。

Ａ君からの言葉を“そっか、Ａ君はそんな気持ちになってたんだね”と受け止めたのち、Ａ君にどんな風にしてほしいと思っているのか聞きました。すると、「赤ちゃんの言葉を使わないでほしい。ちゃんと採血って言ってほしい」「えらいねって言わないでほしい。“がんばったね”ならまだいいかな」「小学生ってわかってほしい」と教えてくれました。そこで Ａ 君がこうしてほしいと思っていることをスタッフに伝えてみてはどうかと提案し、またその方法を相談しました。Ａ君が自分で伝える方法とＣＣＳが間に入って伝える方法を提示して、「一人ずつに言うのは大変だから手紙をかきたい」と決めました。手紙の内容を一緒に相談しながら、“いつもやさしいかんごしさんへ　Ａからのおねがい”というタイトルをＡ君が考え、お願い事を箇条書きにして完成しました。

家族が面会に来られたタイミングでＡ君にお母さんにも話してもよいか確認をしてからお母さんにもことの顛末をお話しました。お母さんからは「いつも家ではお兄ちゃんをしてくれてるので、その分お兄ちゃんだからってあるのかも。結構大人の様子を見ている子なので言っちゃいけないって我慢してる部分あったんでしょうね。これからも入院するかもしれないので、今回こうやって自分の気持ちを看護師さんの方に伝えられてよかったです。ありがとうございました」と話されました。

こども一人ひとりの感じ方や成長段階を配慮しながら、彼らの声を丁寧に聞き、その声をどのように届けるか、多職種や家族も一緒に巻き込みながらこどもの声を尊重できる環境を整えていけるよう心を砕いていきたいと思います。

CCS の窓

子どもたちの「日常」をともに

丸山　里奈（榊原記念病院　CCS）

「ベッドから外見ててさ、洗濯物干してる人が見えたの。なんかすごくいいなぁ。俺もそこ行きたいなって思っちゃって。だって、空飛んでるカラスになりたいってさえ思ったもん。外出られて自由でいいなって。ベッドで動けないでいるとさ、1 分が何時間にも感じるんだよね。当たり前の何気ない日常っていいよね。」

ある時、手術を終え、ICU 滞在を経て病棟に戻って来た時に、ある小学生の男の子が話した言葉です。「当たり前の何気ない日常っていいよね」という言葉

がその時とても胸に響いたことを今でも覚えています。私にとっては「職場」である病院は、もしかしたらもう日常の１つになってしまっていたかもしれないとはっとさせられたからです。

当院は循環器の病院なので、入院する子どもたちはみんな、心臓の治療をしに来ます。“心臓はずっと動いている場所”、“命の源になっている場所”と認識している子どもたちは、「死んじゃうんじゃないか」、「麻酔で眠ったら二度と目が覚めないんじゃないか」と不安になっていることも時にはあります。来る前からそれだけの不安、緊張を背負って来る子どもたちやご家族にとっては、入院すること、検査や手術を受けること、そのどれもが何気ない日常からは遠く離れたものであることを絶対に忘れず、苦痛な時間を少しでも減らせるように、できるだけ安心して過ごせる時間が増えるように、支援の方法を試行錯誤したいと、いつも冒頭の男の子の言葉を思い返しています。

振り返れば、そんないつも通りではない環境で緊張や不安がある中でも、それぞれの向き合い方で自分の治療に臨む子どもたちから教えてもらうことばかりの 11 年間でした。

どんな治療なのか、どんな検査なのかをお話ししたり、どんな風に乗り越えていくかの相談をしたり、一緒に検査や手術に向かったりしても、いくら勉強をしても、私には子どもたちと同じ経験ができるわけではありません。そんな時、先に経験した子どもたちの言葉や様子がいつも、今目の前にいる子どもの支えになってくれました。「麻酔が入ると、こんな感覚がするんだよ」「この体勢だとあんまり痛くないよ」「最初は怖いと思ってたけど、一緒に居てくれれば大丈夫」…言葉で表現するのが得意な子、言葉ではなくても表情や身体で表現する子、子どもたちの表現の仕方は本当に十人十色です。1 人ひとりに真摯に向き合い、そんな声の 1 つ 1 つを大切にこれからも届けていきたいと思います。

そして、治療を繰り返し、この先もずっと自分の身体と向き合っていかなければならない子どもたちが、頑張りたい時にはその力を支えるものの 1 つになれるように、少し立ち止まりたい時にはまた力が湧いてくるまでそっと一緒に待つ、そんな存在でありたいです。

「また来るからね！待っててねー！」
「大人になったら、ここで働く！勉強頑張る！」
「ここでだったらもう１回手術しても良いかも」こんな声がこれからもたくさん聞けるように、多職種の皆さんと、何より子どもたちと一緒に進んでいきたいと思っています。

初めまして！

2025 年度は４名の受講生を迎えています。
受講生からのご挨拶と自己紹介です。

子どもの今を大切に、未来に繋がる支援を

松下　洋子

初めまして。松下洋子と申します。

私は、高校生の頃に児童福祉司をテーマにしたテレビドラマをきっかけに“子どもに寄り添う仕事がしたい”と考え、診療所で病児保育・医療事務の業務を、

総合病院では医師事務作業補助者として子どもに関わる仕事をしてきました。

採血など痛みを伴う処置を嫌がる子どもが多く、事務である私に出来ることは声掛けしかないのだろうか？と考え始めたことがきっかけで、子ども療養支援士(以下 CCS)やホスピタル・プレイ・スペシャリストの存在を知りました。昨年開催された子ども療養支援研究会で「子どもの人権」についての講演を聞き、今まで意識していなかった視点だと改めて気づき、もっとCCS について知りたい！勉強したい！と思いました。

同じような検査や処置をする子どもがいても、目の前にいる子ども一人ひとりの今の思いを汲み取り、メディカルトラウマを引き起こす要因を減らせるような未来に繋がる支援が出来たらと考えます。

CCS としてのスタートラインに立てることに喜びと不安はありますが、講義や実習を通して、医療に関する知識や様々な支援について学べることに感謝して精一杯努力してまいりますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

夢を現実に！

藤倉 みゆ

子ども療養支援士養成課程の受講生になりました藤倉みゆです。

私は、きょうだい児として入院していた弟のそばにずっといて笑顔を守ってくれた、チャイルドライフスペシャリストに憧れて、小学生の時から将来の夢は変わっていません。

強い思いもあったことから、合格通知を受け取った瞬間、とても嬉しい気持ちと、覚悟を持ち、小児医療の中で CCS の必要性を広く理解してもらえるように、まずは自分自身が信頼させる CCS にならなければいけないという強い覚悟ができました。

昨年度までは、大学で社会福祉の勉強をし、実習では病院や子どもの療育センターに行きました。そこでは、子ども達はその子らしく過ごせるように個性をのばすこと、また、どんな家族でもマイナスな部分を改善することも大切であるが、それよりも、家族が持っているプラスなものを伸ばすことで、自信にも繋がり、次のステップに向け進めるということを学ぶことができました。この経験から、全部支援してあげるという考えから、共に頑張るという支援の仕方に変化したことは、自分の中で大きく成長できたことだと思っています。

今まで様々な患児や家族から学ばせていただいたことも大切にし、一人ひとりの子どもやその家族と向き合い、困ったときに 1 番の相談相手として浮かべてもらえるように、この 1 年は一緒に学ぶ受講生の仲間と切磋琢磨しながら、多くのことを学びたいと思います。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

子どもの自信を引き出せる関わりを目指して

三宅 ふう花

合格通知を頂き、念願であった子ども療養支援士のスタートラインにやっと立てたことに大きな喜びを感じております。

令和７年度子ども療養支援士養成課程の受講生となりました、三宅ふう花と申します。私は従妹の入院がきっかけで、子どもの療養環境に興味を持ち始めました。当時まだ中学生だったため、小児病棟内への立ち入りは禁止されていましたが、交換ノートによるやりとりや外出許可時のお出かけで、従妹との繋がりを保っていました。そのような関わりの中で、子どもの入院環境では様々な不安・ストレスを抱えやすいことや、入院以前との従妹の表情の変化を感じ、子どもの入院環境で日常的にコミュニケーションを取り、専門性を持って関われる職種に就きたいと考えるようになりました。子どもの療養環境をサポートする職業を探す中で、子ども療養支援士に出会えた時の感動は今でも忘れられません。

大学では心理学を専攻し、心理実習において、大人から子どもまで様々な困り感を持つ方々と関わってきました。また、ボランティアサークルでの子ども会や読み聞かせは、子どもの年齢に合わせて遊びを考案することの難しさや、子どもならではの視点で遊びが広がっていく面白さなど、多くの学びに繋がった経験だと感じています。

４月から始まる新たな生活に大きな期待と不安を抱えておりますが、頂いた貴重な機会を大切に、日々学んでいきたいと思います。関わりから子どもの自信を引き出し、日常的に心の成長を支えられる子ども療養支援士を目指して精進いたします。

子どもの気持ちに寄り添い、安心できる存在に

永川 千夏

はじめまして。令和 7 年度の受講生になりました永川千夏と申します。

私は学生の頃に子ども療養支援士の存在を知り、遊びの中で子どもの気持ちを受け止め、医療に主体的に向き合えるよう支援する専門性に惹かれ、子ども療養支援士になることを志しました。社会人としては医療機関に就職し、重症心身障害児（者）の日中活動支援や発達支援を行ってきました。そこでは自分の気持ちを言葉で表現できる患者さんばかりではありませんでしたが、パニックになっても一緒に絵を描き気持ちを代弁することで落ち着きを取り戻す患者さん、言葉かけと触れ合い次第で普段の緊張が抜けたり、安心したりする様子を見せてくれる患者さんとの関わりを通し、医療現場には患者さんのこころを支える専門職が必要だと一層強く感じました。

これまで出会った患者さん、辛いときにも支えてくれた家族、友人のおかげで、この度受講生の機会をいただくことができました。その感謝を胸に、この一年間、より複雑な環境に置かれる子どもたちのこころを支援する学びを深めていきたいと思います。療養する子どもたちの不安や寂しい気持ちに気付き寄り添い、少しでも安心してその子らしく過ごせるように支えられる子ども療養支援士を目指していきます。これからご指導をよろしくお願い致します。

事務局からのお知らせ

● 令和７年度（2025 年度）会費の納入のお願い

当協会にご入会頂いた皆様、ありがとうございます。会員の皆様にはニュースレター他、協会からのお知らせを適宜メール配信させて頂きます。

会員の皆様には順次メールにて令和７年度の会費納入をご案内いたします。メールをご確認の上、下記の口座まで会費をご入金の程、よろしくお願いいたします。ご不明な点がございましたら、事務局までお問い合わせください。

※銀行振込:みずほ銀行 宇都宮支店 「普通」4760986

特定非営利活動法人子ども療養支援協会 (トクヒ)コドモリョウヨウシエンキョウカイ)

● 今後の予定

子ども療養支援協会の行事

開催日	内 容	場所
４月１日(火)	令和７年度養成コース前期講義開講	東京、オンライン
５月８日(木)	令和７年度養成コース前期実習Ⅰ開始	茨城、大阪
６月１日(日)	第１回マンスリーセッション	オンライン
６月２１日(土) ２２日(日)	第１２回日本子ども療養支援研究会	東京大学医学部附属病院
６月２２日(日)	総会	同上
７月１日(火)	令和７年度養成コース前期実習Ⅱ開始	宮城、埼玉、東京、神奈川、
７月１３日(日)	第２回マンスリーセッション	オンライン
９月１日(月)	令和７年度養成コース後期講義開始	東京、オンライン
９月上旬（予定）	令和８年度養成コース募集要項申込開始	ホームページ上

編集後記

ニュースレターで取り上げたい話題やご提案・ご希望を募集しています。みなさまからの投稿を歓迎しています。下記までお寄せください。

本協会と子ども療養支援士に関してのご質問はＥメールによりお問い合わせ下さい。
（回答にお時間をいただく場合がありますが、予めご了承下さい）
e-mail：kodomoryoyoshien@yahoo.co.jp
特定非営利活動法人子ども療養支援協会事務局
Email アドレス：kodomoryoyoshien@yahoo.co.jp
住所：〒659-0052 兵庫県芦屋市伊勢町 4-12 スマイル伊勢 208 号
子ども療養支援協会ホームページ
http://kodomoryoyoshien.jp/
NEWS LETTER アーカイブ
http://kodomoryoyoshien.jp/ に掲載

ニュースレター38 号（2025 年 5 月発行）
編 集 長　加藤香恵
編集委員　橋本亜友子　種村佳子
丸嶋史代　笠井晶菜　輕部春帆　宮本知奈美　白石真菜